

平成 22 年 5 月 12 日

東京フォーラム

於：湯島聖堂

中斎塾 東京フォーラム

平成 22 年 第 5 回講話

新鮮な驚き

では恒例の質問を致します。

昨日一日、朝起きてから夜寝るまでの間、嘘をつかなかった方？

(・・・沢山手が拳がる)

有難うと言い、有難うと言われた方？

・・・はい、有難うございます。有難うと言われた方という部分で、なかなか手の拳がらない方が多い。先週、郡山市で福島新樹会の研修会があり、講演をしましたので、同じ質問を致しました。やはりこの質問は手の拳がり方が少なかった。翌日の朝、その会の代表幹事をされている渡邊五郎三郎先生とご一緒して話をしたら、「有難うと言われるのはなかなか難しいですね」と言っておられました。郡山の講演では、渋沢栄一の言行省察の法で説明を致しました。

昨日一日、良い日だったなと思える方？

(・・・沢山手が拳がる)

ちょっと違う質問をしてみます。

ここ 1 週間くらいで、何か新鮮な驚き・感動を感じた方？

ここ 1 月くらいで、何か新鮮な驚き・感動を感じた方？

大分手が拳がりました。

新鮮な驚きというのはなかなか難しいもので、意識して心を空っぽにしていないと、驚きがなかなか伝わってきません。私は郡山で渡邊五郎三郎先生にお会いして、91 歳でこれだけ背筋もしゃんとして、言語明瞭で頭脳明晰な方はそうそうおられないのではないかと驚きました。ご自宅の鎌倉から郡山まで、お一人でいらっしゃっていました。

もう一つは、GW の時です。私は人間ドックで塩分を減らすように言われて、今やっていることは主食として野菜を摂り、副食としてご飯を食べています。醤油はつけずにお酢をつける。そういう食生活をしていきますと、食べものの味が非常に新鮮で感動的な味になります。GWは山におりましたので、山椒や落や行者にんにくを採って食べましたが、非

常に美味しかった。ということで、味覚の点で驚きを感じました。食生活が少し豊かになりました。

安岡正篤先生も「驚かなくなったら人間はお終いだよ」と言っています。日々驚くといっても、驚く為になにか探すわけにもいきません。ただはっと思った時に、自分の心が新鮮な驚きに満たされるように、常にその準備を心の中でしておけば、新鮮な驚き・感動というものがずっと入ってくると思います。

論語から今を見る

本日の論語は、公治長第五 7~11 です。

【七】 もう ぶはくと しる じん しいわ し またと しいわ ゆう
孟武伯問う、子路は仁なるかと。子曰く、知らざるなりと。又問う。子曰く、由
せんじょう くに そ ぶ おさ そ じん し きゅう いかん しいわ
や、千乗の国、其の賦を治めしむべし、其の仁を知らざるなりと。求や何如と。子曰く、
きゅう せんしつ ゆう ひゃくじょう いえ これ さい じん し せき いかん
求や、千室の邑、百乗の家、之が宰たらしむべし、その仁を知らざるなりと。赤や何如
しいわ せき そくたい ちょう た ひんきゃく い そ じん し
と。子曰く、赤や、束帯して朝に立ち、賓客と言わしむべし、其の仁を知らざるなり
と。

孟武伯と孔子が相向かいで立っています。二人が話をしている後ろに、三人のお弟子さんが立っている。孟武伯が後ろに立っているお弟子さん三人を指しながら、「この者たちはどうですか」と孔子に聞いている、そんなイメージが浮かぶとよいでしょう。

孟武伯が、「子路は仁の徳がありやなしや」と聞きました。

孔子は「そういうことは知らない」と答えました。

更に尋ねたので、孔子が答えました。

「子路は、戦車を1千台持っているような大きな国の兵隊を教育訓練する、軍事面で治めていくのであれば、能力を発揮するだろう。但し、仁の徳を身につけているかどうかは知らない」

次に「冉求はどうでしょうか」と聞きました。

孔子が「冉求は穏やかな人で色々な雑事に長けているから、1千個の家があるような集落（今の日本で考えれば、小さな都市程度）戦車を百台くらい出せる標準的な貴族の家の家臣の長をやらせればよかるう。（国で言えば、官房長官の仕事をやらせれば能力を大いに発揮するだろう）しかし、仁の徳を身につけているかどうかは知らない」と答えました。

次に「公西赤はどうですか」と聞きました。

孔子が答えました。「公西赤は顔つきもいかめしいし、礼服を着て朝廷に立ち、大事なお客様と交渉させるのは適役である。しかし仁の徳を身につけているかどうかは知らない」

と答えました。

論語は今の時代に当てはめて考えることが必要です。

子路は軍人として修羅場に立たせた方がよいと言っていますから、さて誰でしょうか。防衛大臣となると、北澤さんでしょうか。今、普天間問題でしょっちゅう顔が出ますが、身体を張ってやるというよりも口を張ってやっているように感じます。どうも日本の防衛面は、少し怖いと感じます。公安委員長は自分の不祥事を口でごまかしたのですから、子路とはまるっきり違う人物だと思います。なかなか日本の大臣の中には人物がいないような気がします。

冉求は官房長官ですから平野さんですが、宇宙人の総理大臣を頭に頂いているので、言葉が揺れるのを一所懸命直して、普天間問題では自分がいけにえになろうという発言をしましたが、それより事態の方が先に進んでしまっています。ということで、平野官房長官も、その任に非ずというところでしょう。なかなか今の日本の総理大臣のお守りをする女房役は、誰がやっても難しいだろうと同情します。

公西赤は外務大臣ですから岡田さんです。顔は厳ついし、礼服を着て大事な客と交渉するという部分でも、結構こなしているような気がします。

鳩山さんは、すきっと辞めませんね。人物の出处進退については、出てくる時は周りの人に引き立てられ、辞める時は自分の意思で辞めるのが大事だと言われます。鳩山さんはさっと辞めないで、ぐずぐず行くだらうと思います。カレントの6月号の原稿に、「鳩山さんが普天間問題で、ある程度人間としての常識を持ち合わせていれば引退するだらう。引退したなら、菅さんと仙谷さんがデットヒートをくり広げて、どちらかがなるであろう」と書きました。

今の日本の場合は、総理大臣になりたいと思えば誰でも、権謀術策を労すればなれる国ですし、なれる時代です。ですから、総理大臣になろうとする人は、なったら何をするかを一所懸命考えておかなければいけないと思います。以前、小沢さんが、総理大臣になる気はないかと聞かれ、「総理大臣になるには10年くらいかけて身辺を整理しなければならぬから、私には無理だ」と答えたそうです。その時は身辺というのは女性問題だけを連想しましたが、カネの問題まで付いているとは思いませんでした。

論語の中の登場人物と、今の日本の大臣の顔を一人ひとり重ね合わせて考えていくと、登場人物が生き生きして動き出します。

【八】 子^し子^し貢^{こう}に謂^いいて曰^{いわ}く、女^{なんじ}と回^{かい}と孰^{いず}れか愈^{まさ}れると。対^{こた}えて曰^{いわ}く、賜^しや何^{なん}ぞ敢^{あえ}て回^{かい}を望^{のぞ}まん。回^{かい}や一^{いち}を聞^ききて以^{もつ}て十^{じゅう}を知る。賜^しや一^{いち}を聞^ききて以^{もつ}て二^にを知ると。子^し曰^{いわ}く、如^しかざるなり。吾^{われ}と女^{なんじ}と如^しかざるなりと。

孔子が子貢に「お前と顔回と、どちらが優秀だと思うかね」と聞きました。

子貢が「私は顔回には及びません。顔回と比較しようとは思わない。顔回は一を聞いて十を知る人物です。私は一を聞いてせいぜい二を知るぐらいに過ぎないので、力量が違いすぎる」と答えました。

孔子が「その通りだ。私もお前と同じで、顔回的能力には及ばない。その部分は私もお前も同じようなものだよ」と言いました。

子貢が出過ぎることが多いから、顔回と比べながら身の程を知って行動したらどうかと孔子が諭しています。

「回や一を聞いて以て十を知る」という部分で、「鳩や八回聞いて以て一を知る」と浮かびました。鳩山さんは 8 ヶ月間学んだ結果、やっと抑止力が日本に必要なのだということを知ったわけです。

翻って、殻が硬くなっていると良い科白を何度聞いても通り過ぎてしまいます。自分の殻が固まっていないかどうか、時々見直しするのも良いと感じます。

【九】 宰^{さい}予^よ 昼^{ひる}寝^{いね}たり。子^し曰^{いわ}く、朽^{きゅう}木^{ぼく}は彫^えるべからず。糞^{ふん}土^どの牆^{しょう}は朽^ぬるべからず。予^よに於^おてか何^{なん}ぞ誅^せめんと。子^し曰^{いわ}く、始^{はじ}め 吾^{われ} 人^{ひと}に於^おけるや、其^その言^{げん}を聴^ききて其^その行^{こう}を信^{しん}ぜり。今^{いま} 吾^{われ} 人^{ひと}に於^おけるや、其^{げん}の言^きを聴^ききて、其^{こう}の行^みを觀^みる。予^よに於^おてか是^{これ}を改^{あらた}むと。

宰予というのは、非常に口達者な人です。その宰予が昼寝をしていました。

それを聞いて孔子が言いました。

「腐ってボロボロになった木は、彫る事はできない。かさかさに乾いた土で作った土塀は、上塗りは出来ない。どうにもならない人間である宰予は、これ以上怒るわけにもいかない。いくら言っても本人には馬の耳に念仏である。今まで私は人の発言を聞いて、なかなか立派な人物だと思っていた。しかし宰予の行動を見ると、言葉と行動があまりにも違いすぎるので、言葉を聞いた後にその行動を見るように自分自身の考え方を改めた。」

宰予で失敗したので、自分自身の判断基準を変えたと言っています。

人物の観察法として、渋沢栄一は視・観・察を論語の中からとっています。視・・・どういうことをしている人か、その人間の行動や話の内容をよく視る。観・・・ある程度時間をかけて、その人の言っていることとやっていることが一致しているかどうか、よく観察する。それによってその人間の良い所・悪い所が明確になってくる。察・・・その人物がどこで満足するか、動機がどこにあるか、最終的な行動の結果をよく見ていると、その人間の心中まで見えてくる。その次にその人物がどういうことをするか、そのあたりが見える。

渋沢栄一は『論語講義』の中で、明治維新の頃では、井上馨の人物の判断法は素晴らしかったと言っています。『論語講義』では、西郷隆盛や大久保利通、木戸孝允といった人物は多く書かれていますが、井上馨や大隈重信のあたりはあまり出てきません。しかしこうやって褒めているのは珍しいと感じました。

同じく『論語講義』の中で、あまり口達者で目から鼻に抜けるような人間は長生きしないと言っています。例として、渋沢栄一を一橋家に推挙した平岡円四郎を挙げています。平岡円四郎は当時、「徳川は一橋でもつ、一橋は平岡でもつ」と言われるほどの人物で、一橋家の屋台骨を背負っていた家老でした。一橋家に来客があると、その顔色を見て用事を察したと言います。目から鼻に抜けるような人であるから、そういうことが災いして暗殺されたと思うと語っています。自分の恩人ではあるけれども、あまり先を見通した発言をすると、世の中に理解されないで、結果暗殺されてしまったというのです。他にも、陸奥宗光外務大臣や藤田小四郎も同じように明敏な人物であったから、非業の死を遂げたと言っています。当時は自分の身の周りの人間もどんどん暗殺されましたから、分かってもあまり先走って言わない方が良いと感じていたようです。

渋沢栄一について、もう少しお話しします。

渋沢栄一は一橋家に仕えて信用を得ていったわけですが、それには 3 つの理由があります。

一つはお金です。一橋家に仕えた時には、お金を使い果たして一文無しでした。周りの人たちから掻き集めて 25 両を借りました。それを、四両一分のお給金を貯めて、全部返しました。食べものを節約しました。ご飯を炊くことを覚えたのは、その頃だと書いています。肉は高いのでめったに食べられないから、一橋家の中を走り回るネズミを捕まえて焼いて食べたら油があって美味しかった、と後年、お孫さんに話しています。当時の志士たちは借ったお金は返さないのが当たり前だったようですが、渋沢栄一は 4 ヶ月か 5 ヶ月で 25 両を全額返済したので、大した人間であると信用を得ました。

二つ目の信用は、清廉潔白を証明しました。平岡円四郎が暗殺されて、黒川嘉兵衛という用人が後任になりました。その黒川という用人が、渋沢栄一がどういう人物なのか試したのでしょうか。当時の用人たちは料亭外交をしていました。黒川用人に連れられて行った料亭で女性をあてがわれますが、渋沢栄一は血相を変えて部屋を飛び出し、怒って帰ってしまいました。これによって又一つ渋沢栄一の信用が一橋家の中で付いて、出世街道を進んでいったわけです。

三つ目は、剣の腕と胆力を証明しました。渋沢栄一は京都の陸軍奉行の詰め所にいました。幕藩の中で大沢源治郎という人間が倒幕を企てている情報があり、その捕縛の正使として奉行所から出す人物がいないので、渋沢栄一がその任にあたるよう命じられました。大沢源治郎は腕も立つので、副使に新撰組を付けるから、一緒に捕まえてきてくれということでした。土方歳三らと一緒に捕縛に向かい、「我々が先に行って捕縛をするから、その後で、罪状を口上すればよい」と言われますが、渋沢栄一は腕に自信もありましたから、自分が先に乗り込むと主張しました。渋沢栄一は大沢源治郎が泊まっている寺に真っ先に乗り込んで、大声で奉行の命により捕縛する旨を伝え、相手はその気迫に呑まれて神妙に縄を受けました。これによって渋沢栄一は氣力があり胆力があり、腕に覚えもありそうだとということで、そちらの方も信頼が湧きました。

【十】 子曰く、吾^{しいわ} 未^{われ}だ剛^{いま}者^{ごうしゃ}を見^みずと。或^{ある}ひと対^{こた}えて曰^{いわ}く、申^{しんとう}根^{とう}ありと。子曰く、根^{しいわ}や^{とう}慾^{よく}あり。焉^{いづく}んぞ剛^{ごう}なることを得^えんと。

孔子が、「意志が強固で何ものにも動かされない強い人間を見たことがない」と言ったところ、或人が「申根がいるではありませんか」と答えました。

孔子が「申根は欲が深い。どうして強いと言えるものか」と答えました。

ただ腕力があるだけでは駄目で、それなりの強固な意志があって欲で動かないようであればいけないと言っています。

小沢さんは剛腕だと言われていますが、意志強固で何ものにも動かされないのでしょうか。検察とのやり取りを見ると、あまりそういう感じがしません。特に今回、小沢さんが起訴されるかどうか相当大きな問題でしょう。その判断の期限は7月27日までだそうです。そうすると参議院選挙と絡んできて苦しいですね。小沢さんが本当の剛者であれば、こうはならないとこの文章は読みました。

【十一】 子貢曰く、我人の諸れを我に加うるを欲せざるは、吾も亦諸れを人に加うる無からんことを欲すと。子曰く、賜や爾が及ぶ所に非ざるなりと。

論語に「己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ」という文言がありますが、この文章とは、似ていますがまるっきり違います。

「己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ」は、自分が人からやられたら嫌だと思ふことは、人にもやらないようにしたいという意味です。これは自分の意思だけで結論が出ます。

「人の諸れを我に加うるを欲せざるは、吾も亦諸れを人に加うる無からん」は、他人が自分に仕掛けてくる嫌なものは、自分も人に仕掛けないようにしたいという意味です。根本的に違います。

孔子が子貢にはいつも辛口の科白を言いますが、ここも辛口で、「お前はまた、その境地に達していないから出来ないよ」と言っています。

こういう人は周りに沢山います。自分自身はどうか、考えてみると良いでしょう。

論語の科白でも何でも良いから、毎日、何か言い続けるとよろしい。私は鉄砲洲神社で週1回、詩吟を習っています。そこへ行くと、入り口に「威張るな・欲張るな・妬むな・怒るな」と書いてあります。行くと目に入りますから、自然と復唱します。そうすると、だんだん身体に沁み込んで来ます。何か一つ、自分にとって良いなと思ふことを毎日繰り返すことです。そうすると自然と身に入ってきます。論語の素読も、そういう効能で推奨されています。

有名無力・無名有力

本日紹介する本は、『直弟子が語る 安岡正篤から学んだこと』（下村澄著 アーカイブス出版）です。下村先生は素心・不器会という勉強会を主宰されていました。去年亡くなられて不器会もお終いになりました。非常に良いことが書いてあると思いましたが、ご紹介します。下村先生は耳学問の方でしたが、良い所だけをつまむのが実に上手で、人と人を繋ぎ合わせるのが非常に得手で素晴らしい人だと思いました。この本は安岡正篤先生の言葉がそのままずっと書いてあって、ご本人がどう係わりあっていったかが書いてありました。

この本を読み返してみても良いなと思ったのは、「有名無力・無名有力」という言葉と、エ

ビの話です。

有名無力・・・人間は有名になると色々な誘惑が押し掛けてくるし、その名から利益を得ようと人が群がってくるから大変だというようなことが書いてあります。安岡先生ご本人も「私は講演が多くて疲れる。精神が飢えてしまう。だから一日中黙ってじっとしているのが好きだ。」と言っておられます。有名になればなるほど、見た目には華やかな人生に見えるけれども、中身は亡骸のような人生であると書いてあります。

無名有力・・・無名で華々しい動きはしないけれども、実力がどんどんついて来ると、知らず知らずに滲み出すように周りに浸透してくる。やがて少しずつ名前が出てゆく。

有名無力な生き方よりも、無名有力の方が人生として良いとありました。

エビの話というのは、論語で言えば「学則不固」です。学んでいれば固まらないという意味です。頑固者になると、自分の考えていること・自分の知っていること以外は受け付けない。成功体験をした社長は、同じ体験通りの路線を引こうとするけれども、それには時代が合わなくなっていることがよくあります。

エビは中身をどんどん成長させて大きくなってくると、古い殻を脱いで一回り大きくなっていきます。身についた殻を脱ぐのですから相当痛いと思いますが、その痛みに耐えて古い殻を脱ぎ捨てる、今まで我慢していた中身が又、大きくなる。生ある限り、その古い殻を脱ぎ捨てる。そして脱ぎ捨てるだけのパワーが無くなったから、あの世に逝く。結婚式の引き出物でエビを使うのは、そういうたゆみない成長と、腰が曲るまで共に長生きしようという意味が込められていると書いてあります。

六中観

私がかきました『陽明学のすすめ 安岡正篤「六中観」』は、六中観だけをとりあげて書かせて戴きました。私は以前、群馬県の太田市内の勉強会で7年間くらい「六中観」について毎月解説をしていました。「六中観」は色々な角度から見ることができます。

「六中観」 安岡正篤

忙中有閑 苦中有楽 死中有活

意中有人 壺中有天 腹中有書

忙中閑有り・・・忙しければ忙しいほど、閑は作れるものです。本当に忙しい時は、自分にとって大事な閑を生み出せる。作り出せないのは、まだ人物に至っていないからです。

私は社長業をやっている時はボロボロになっていました。このまま続けていたら、命を縮めることになっていたと思います。今は時間がたっぷりあります。その時は忙しくて忙しくて・・・と書いていましたが、その中でもそれなりの閑は作っていました。しかし構造改革をして社長業を下りてしまうと、自分の思うような時間が作れるようになりました。自分のやりたい事をやるようにしていくと、結構、閑を生み出せるものです。忙しいことは良いことで、自分が閑を作るチャンスであると考えればよろしい。

苦中楽有り・・・苦しいと思う時は、その中にどっぷり浸かれば、苦しみがだんだん楽しみになるという考え方です。苦しいと思った時に心にゆとりを持つようにすると、その苦しみを客観視できる。絶体絶命のピンチに陥った時など、この苦しみの味わい方が分かってくると思います。苦しいことは良いこと。自分が本当に楽しいと感じるものを見つけるチャンスがあると考えればよろしい。

死中有活・・・死んでしまうと思うくらいピンチの時、絶体絶命でどうにもならないと思った時には、諦めないこと。諦めないで頑張っていれば、必ずどこかにチャンスが出てきます。普通だと倒産してしまうような時代の荒波に飲み込まれないで、何とか生きる術を見出して、前に増して発展させていくことが可能である。それは自分でも周りからでも、もう駄目だろうと思ったところからでも、逆転復活は十分できるということです。死ぬほどの目にあった時ほど、新しいチャンスが巡ってきたと頭の中を切り替えれば行ける。それが死中有活です。

壺中天有り・・・別世界のことです。世俗のことに付き合っていると疲れます。色々なことをしていると疲れきってしまう。疲れたら、どこかで楽しい息抜きをすると良い。私は温泉が好きですし、赤城に行くのも、散歩をするのも壺中の天です。自分自身の日常、世俗と思うものとは全然違うもの、別天地を作ると力が出ます。奥の方から湧き起ってきます。趣味でも良いですし、どこかの場所でも良い。それに没頭すれば、日頃の煩わしさが全部飛んでしまって、リフレッシュする。新鮮な心持ちになるようなもの、場所を持つ。これが大事です。

意中人有り・・・事業をしている中で壁にぶつかった時に、ふっと頭の中にその人の顔が浮かんで来るような付き合い方を、それぞれしておく方が良い。安岡正篤先生が内閣総理大臣の心構えということで、意中有人を世の中に出して広がりました。総理大臣になる時は、各大臣は誰にするか腹の中に決めておかなければいけない。内閣総理大臣になってから考えるのでは遅いと教えておられました。中曽根康弘さんは毎回総理大臣になりたいと思って、一所懸命書きためたものがあつたようです。何か大きな事業をしようとする時には、必要な時に声をかければ手伝ってくれるような人間関係を作っておく必要がある。

腹中書有り・・・書は哲学です。人間が生きていく上には、肚の中に哲学をずっしり収める必要があります。哲学とは、人生如何に生くべきかという命題を、自分なりにしっかり持っておくこと。

私は人生を生きる上での心構えは、「利によりて行なえば、怨み多し」という言葉を論語の中から戴いて、肚の中にずっしり収めています。渋沢栄一も「利によりて行なえば、怨み多し」という言葉を、経営者が判断基準として持つべきものだとして、自分でも守り、他人にも推奨しています。

六中観をさらっと説明しました。これは普通の解釈のものです。又、少しずつ形を変えて説明することができます。ですから味わえば味わうほど素晴らしいものだと思います。

安岡正篤先生は『百朝集』の中で、「六然」という言葉を紹介しています。明の崔銑という人の言葉です。崔銑は清廉潔白で剛直な人で、彼が投獄された時に王陽明が反対し批判をしたところ、王陽明自身も投獄されてしまったという逸話があります。

「六然」 崔銑

自処超然・・・ものにとらわれない。

処人譎然・・・人と相対する時は、相手が気持ちよくなるような対応をする。

有事斬然・・・ことある時には、優柔不断に考えないですぱっと行動に移す。

無事澄然・・・ことがない時には、澄んだ水のようにしていれば良い。

得意澹然・・・自分が得意絶頂の時には、あっさりとした行動が良い。

失意泰然・・・がっかりした時には、泰然自若としてじたばたしない。

日々過ごす時に、この六然というものは非常に役に立つと思います。ここらへんを踏まえて「六中観」も書かれたのだと思います。安岡正篤は古今東西の良い言葉・良い人物を探してそれを紹介していますが、「六中観」だけは自分で作っています。自分が作った科白が残っているのは珍しいことです。

まず、行動する

論語を朱子学的に読むか、陽明学的に読むか。渋沢栄一が一生貫いたのは知行合一です。行動が第一で、机上の学問は駄目だと明解に言っています。従って陽明学で読む。陽明学は実践です。何か気になるものがあったら、現地に行くこと。何か疑問に思ったこと

があったら現地に行く。気になる文献があったら原典に当たる。行動を起こすことが必要です。

また、中斎塾フォーラムでは、自然と「足るを知る」という考え方が身につけば良いと思っています。論語の読み方も、論語をすらすらと読めるようになれば入門です。次の段階は、自分の好きな言葉を人に解説できる。更に上の段階は、論語の中の登場人物が生き生きと動く。スクリーンで見ているように素読が出来れば上級です。

知らず知らずの間に論語をわがものとし、足るを知るという考え方をわがものにすることを目標に進めていきたいと思っています。その時の大きな手段として、陽明学の行動を大いに活用して戴きたいと思っています。とにかく行動に移してみる。そうすると今までと違ったものが、ぱっと目に入ってくると思います。

時事評論

皆さんにお聞きします。

鳩山さんは5月、6月で辞めると思う方？

・・・多少おられますね。

ぐずぐず居座っていて辞めない。参議院選挙も鳩山さんを頭にやると思う方？

そうするとその結果、民主党が負けると思う方？

・・・有難うございます。

しかし、何故そこまで悪くなったのでしょうか。鳩山さんは状況判断が出来ないようです。空気が読めないと言いますが、「あなたは馬鹿だね」と面と向って言われると、褒めてくれていると思っている。大概腹が立ちますが、それを自分に良いように解釈して捉える人が世の中にいるのだと思います。

今の民主党は有名無力になりました。権力を握った途端に、見えるものが見えなくなってきた。普天間問題でも、あれだけ嫌だと言われているのに、まだ沖縄に行きたいと言っています。アメリカへの言い訳を作っているようにも見える、とマスコミには言われていますが、どうもそうではないと感じます。鳩山さんは、愚直なまでに誠心誠意お願いしていけば、必ずや徳之島の人も沖縄の人も私の意志を分かってくれて、私の思い通りに話が進んでいくだろうと、勝手に思い込んでいるような気がします。人の意見をそのままストレートにとらないで、自分に都合の良いように受けてしまう。それがそのまま民主党全体に広がっているから、わずか8ヶ月かそこらで党全体が有名無力になってしまったと感じます。

民主党が変わるとすれば、1500万円小遣いの話と小沢さんのお金の話がすっきりする、国民が納得のいく話ができたとということになれば、がらっと局面は変わると思いますが、まず、そうはならないだろうと思います。その結果日本はどうか。坂道をどんどん転げ落ちていって、日本の国は世界に冠たる散々な国になっていくと感じています。来年の後半は、マスコミが言う二番底とは少し違うと思いますが、どうにもならない国家・社会・経済になっていくと思っています。それに対しては、自分自身で10年くらい頑張れると思えるかどうか。そう思っている人は対抗できる。それなりのエネルギーは、これから学んでいけば湧いてきます。学べば学ぶほどパワーが生まれますので、そのつもりでお互い学んでいきましょう。

以上で本日は終了します。有難うございました。